『energy』エッソ・スタンダード石油　1964年

当財団の「アドミュージアム東京」に所蔵された多彩なPR誌から、今回はエッソ・スタンダード石油の『energy』をピックアップ。どのように企業の個性を表し、時代を捉えているかを探る。

上：「うみ」が特集テーマの創刊号より「日本の産業（1）造船」。下左：創刊号の表紙。下右：古今東西の海にまつわる神々や怪物を紹介した記事

上左：「探検」がテーマの第２号の表紙。上右：挿画も楽しい川喜田二郎のエッセイ。下：藤木高嶺の2年に及ぶ体験記「カナダエスキモーと暮して」

エッソ・スタンダード石油（現・エクソンモービル）のPR誌『energy』（季刊）は、後に作家として活躍する高田宏を編集人として発足しました。企業PRの役割とは一線を画し、毎号テーマを設けており、会社のPRに関する記事が見当たりません。商業誌のように売り上げにとらわれない自由さ、また、余計なものを削ぎ落とした同人誌のような純粋さによって、一本の筋が通った編集になっています。

特集主義の編集方針。創刊号は「うみ」がテーマ

1964（昭和39）年4月1日発行の創刊号を見てみましょう。

特集テーマは、「うみ」です。

「未知数の世界 海底へ」は、東京水産大学教授・佐々木忠義、新野弘が監修し、豊富な写真で深海の生物やプランクトンを見せ、その美しさと神秘を感じさせます。大陸棚が天然資源の宝庫であることを説明し、大洋底の謎を臨場感豊かに記述しています。

「エッセイ・“海”をめぐって……」では、朝日新聞社『科学朝日』編集部・岸田純之助、作家・北杜夫、作家・中村武志、詩人・丸山薫、北欧文学研究家・山室静、日本プロゴルフ協会理事長・浅見緑蔵らが自分の体験、考察をもとにそれぞれの視点で海への思いを語っています。海は日常とは違う何かを喚起するようです。

「海の表情―日本の五つの海―」は、5人の写真家と詩人による「海」をテーマにしたコラボレーションです。谷川俊太郎によって詩が選ばれています。いずれも見事で感動的な写真と詩の取り合わせで、いつまでも見ていたいページです。

小松左京のSF短編「海底油田」は、ムウ大陸の高度な文明にまつわる恐怖SFです。当時、新進作家として注目され始めた小松は高田の友人であり、後に監修者として協力することになります。

写真・杵島隆、文・北川幸比古による「日本の産業（1）造船」は、日本の造船の現状をコンパクトに豊富な写真とともに、わかりやすくレポートします。

「海神と怪魚―海の神話・伝説から―」は、古今東西の海の神話・伝説をコンパクトに紹介しています。

最後のページに「“海”をしらべたい人のために」という見出しで、便覧が作られています。〈博物館・水族館〉〈研究所・実験所〉〈関係官庁・協会・学会・新聞・その他〉の項目で名称、住所、電話番号を記載。大いに役立つデータです。

世界中から「探検」物語を集めた創刊２号

1964年７月１日発行の第２号のテーマは「探検」です。

最初に３人の監修者の言葉が載っています。登山家・紀行文学者の深田久彌は「探検の盛んに行なわれるのは、つねに国民の士気があがっているときである。現代はその時代である。エネルギーに充ちた野心的な青年の眼は、一様に国外に向けられている。この小冊子がそういう青年の心の炎に一束の薪を加えることになれば、監修者の一員として快心の喜びである」と記しています。文化人類学者・泉靖一は「大航海時代から、宇宙開発に至る、人間の『未知の世界』にたいする、意欲

Yoshiro Okada
1934年東京都生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業。56年電通入社。
コーポレートアイデンティティ室長などを経て98年退職。70年の大阪万博では、
「笑いのパビリオン」を企画。80年代は電通のCIビジネスで指導的役割を果たす。
著書に『社会と語る企業』（電通）、『世界一の映画館と日本一のフランス料理店を
山形県酒田につくった男はなぜ忘れ去られたのか』（講談社）など。

と行動の一端を読者に感得していただければ、望外の幸である」と記します。科学・技術編集者の岸田純之助は、「科学技術の発展は探検の意味を拡張し、探検の領域も急速に拡大している」と書き、「……それよりもっと遠い天体、火星や金星へは、人の乗らない無人の探測器が、精巧な計器を積んで飛行し、その秘密をさぐっている。これもまた新しい形の探検であると言えないだろうか。私はそのような探検に心を惹かれている」と記します。

地理学・文化人類学者である川喜田二郎の「これからの探検」は、〈地理的探検時代は終わった〉〈地域の内容を知る探検〉〈課題を追求する探検〉〈ヴィジョンの形成〉〈分業〉〈貢献という感覚〉〈蓄積〉〈情報コントロール〉という8つの項目で、探検の歴史をたどり、その問題点、課題を提出しています。長年の経験に基づく重みのあるエッセイです。

動物学者・川村俊蔵の「探検の費用」は、実際に1960年4～9月にビルマ・タイ遠征を行ったときの費用を細目まで紹介し、注意事項を述べています。

人類学者・岩村忍の「日本人による探検小史」は、19世紀初頭の間宮林蔵から1910年の白瀬中尉までの日本人の探検の歴史を記述しています。

社会人類学者・中根千枝の「ナガ・ランド」は、独特の文化・風習で知られる少数民族・ナガ族のいるインド奥地のナガ・ランドで調査研究を行ったときの若き日の思い出を生き生きと記します。

登山家・三田幸夫の「マナスルへの初挑戦」は、1953年の第1次マナスル登山隊が頂上近くまで迫りながら引き返した時の様子を回想します。

村山雅美の「南極酷寒の旅」は、南極観測の旅の苦労が伝わってきます。厳しさが極限に達するとそこにユーモアまで感じられます。

藤木高嶺の「カナダエスキモーと暮して」は、1963年、2カ月にわたってイヌイットの集落に住み込んで生活を共にした報告です。

泉靖一の「トケパラの洞窟絵画―南アンデスの狩猟文化」は、アメリカ大陸最古の芸術壁画を紹介しています。

深田久彌の「探検家の肖像―オーレル・スタイン―」、加納一郎の「リチャード・バード―極地探検家」、今西錦司の「スタンレー―アフリカ探検家」、石田英一郎の「キャプテン・クック―世界周航探検家」は、偉大な探検家の生涯を簡潔に要約しています。

鍛冶晃三の「地図からみた世界の変遷」は、1世紀頃のローマ時代の地図から1964年の現在の地図まで9つの地図で世界の認識を示します。

「探検50冊の本」「世界探検年表」は貴重な資料です。

『energy』は、無料で配布するPR誌という利点を最大限に活かし、読者の知的好奇心を大いに刺激しました。バランスのとれた企画を避け、読者に深く考える機会を設ける雑誌として注目され、新聞などのメディアに頻繁に取り上げられていました。

〈参考文献〉
『彷書月刊2003年7月号：PR誌の向こう側』弘隆社

Column

高田宏と『energy』

左から、1964年第3号「海外における日本研究」、1965年通算6号「地球の内側」、1966年通算11号「現代生活と科学工業」の各表紙

編集者としてキャリアを積んでいた高田宏は、PR誌『energy』の創刊のためエッソ・スタンダード石油（当時）に入社。会社から一切を任された編集方針は「一冊の本のように、読んだ人がじっくりと考え、そのあと本棚に保存される雑誌」であった。大胆にも一冊まるごと1つの特集で構成し、さらに読者の保存欲をかき立てるため、図版や写真を多用。独自の資料作成にも力を入れた。結果、本誌の特集のかなりの数が、後に本としてさまざまな出版社から出版されている。

執筆者も高田自身の知人から始まり、その後芋づる式に増え、執筆者総数は、本誌が11年間にわたって発行された39冊中、約1,000人にのぼった。